

## 有賀貞著、『アメリカ史概説』

東京：東京大学出版会、1987、314 p.  
¥2400

従来、アメリカの歴史を学ぶとき、そして教える者として教室内で取り扱うとき、植民地時代から始めて建国の時代、ジェファソンやジャクソンの時代、南北戦争前後、そして19世紀後半の資本主義拡大発展の時代、さらにポピュリズムや改革主義の時代、ウィルソンに繁栄の1920年代、そしてニューディールと、時の経過と共に逐次的にできごとを網羅し説明するのが普通であった。

歴史を学ぶとはそういうもので、誰も大した不満を示さずにつくり返してきた。どこの国の歴史であれ、年代順に出来事を学び、記憶し、分析することは、学ぶ者の基本的な態度であるとされてきたのだった。一国の歴史をこうして学ぶことは、その国の発展や変化を「時の流れ」として捉える上で十分な意義を持つからであった。そして、まさにこの「時の流れ」を意識することこそが、歴史研究の醍醐味であると言えるのである。

しかし、教える者の立場からいうと、歴史の概説書がすべてこの立場で書かれていることは問題であった。基本的文献がどれも同じようなものになってしまうからだ。もちろん、研究者や著者の思想的立場や歴史解釈などの相違が、それぞれの歴史概説書を特色づけているのは確かであるが、「時の流れ」の中での歴史の説明であることでは大差なかった。

一方、表面的な変化の底で時代を超えて大きな変化を見せずに存在し続けるものが歴史にはあるはずである。それが伝統を形づくり、あえて微妙なことばを用いれば、「国体」を形づくっているのであろう。もちろん、その「伝統」として捉えることのできるものは、まったく変化しないという訳ではない。ただ、従来の歴史に述べられた政治権力の争奪だと、産業革命だとというような目につきやすい変化とは別に、国民の日常生活の奥底で少しづつ変わりながら、社会の基盤を支えてきたのがこの「伝統」だったのであろう。

R・ホーフスタッターの *American Political Tradition* 『アメリカの政治的伝統』(田口・泉訳 岩波現代叢書) やルイス・ハーツの *Liberal*

*Tradition in America*『アメリカ自由主義の伝統』(有賀・松平訳 有信堂), そして D・ブースティンの *Genius of American Politics*『アメリカ政治の特質』(今津・伊東訳 創元社)などの名著は, この意味で重要な文献であった。また, 同様に, W・ケンドールと G・ケアリーのふたりによる *The Basic Symbols of the American Political Tradition*『アメリカ政治の伝統と象徴』(拙訳 彩流社)も, 時代を超えた不变のものを探る作業を試みたものとして忘れることはできない。

しかしながら、歴史にはあるひとつの出来事や事柄が時代を経て引き継がれてきたという側面もある。例えば, 19世紀前半に呼ばれた女性の参政権が, 20世紀になって花開いたようなことである。項目ごとに語る歴史, 項目ごとに分析する歴史研究というべきアプローチである。こうしたアプローチは, ある国の歴史上の特色を際立たせ, なおかつ「時の流れ」を意識しえるものとして, 効果的な歴史解釈であるはずである。

アメリカ史についていえば, この立場からの研究書は膨大である。しかし, 同時にこのアプローチによる歴史解釈を一冊の概説書としてまとめたアメリカ史の研究書はこれまでなかったと言ってよい。もちろん, 政治史, 経済史, 外交史, 文学史という分類はあったが, こうした分類を超えて, アメリカ史の本質にせまるようなものはなかった。この事実が, 教室でアメリカ史に携わる者としての大きな悩みでもあった。

一橋大学の有賀貞教授による『アメリカ史概説』(東京大学出版会, 1987)は, このアプローチからの歴史概説書として注目に値する。

本書はアメリカ史の主要な特色, 時代区分に関する諸説, 国際関係史の中のアメリカ, アメリカ人の自国像の特色と変遷, 日本におけるアメリカ史研究, アメリカ史の主要問題の6つの項目を持ち, それぞれの項目でのアメリカの変化・発展を語ることで, 全体としてのアメリカ史を語る形を取っている。そして, アメリカ史の主要問題として, 「植民地～建国期」, 「南部奴隸社会と南北戦争」, 「フロンティアと移民」, 「工業化・都市化」, 「最近のアメリカの状況」の5つをあげ, それぞれの項目を詳述している。

アプローチのユニークさ, そしてその内容の豊富さで際立っており, さらに著者自身が本書の目的とする「入門書として役立つとともに, アメリカ史についてすでに相当の知識をもち, 特定の問題について研究しようとする人々のためにも簡単な研究の手引き書となる」(i)

頁）ことを達成しているという点では、高く評価できる。記述も的確で読みやすい概説書に仕上がっている。

著者の『アメリカ政治史』（福村出版、1985）と合わせて読めば、アメリカ史の全体像はほぼ完璧に近いかたちで構築されるだろう。その意味では、すばらしい教科書が提供された訳で、教室でアメリカ史に何らかの形で携わる者として、これ程喜ばしく感じることはない。

さらに、本書の大きな特色のひとつは、「アメリカ国民の意識形成と自国史像」（第IV章）と「日本から見たアメリカ史の意味」（第V章）の2点に触れたことだろう。アメリカ人自身が自国の歴史をどう位置づけ、その中にどのようにして「国民」意識を養ってきたのかは、「移民の国・アメリカ」を語る上でどうしても避けられない問題である。これまで民主主義の価値だと、自由平等や独立宣言、憲法といった価値への同化、あるいはフロンティアの前進にアメリカの特色を求めたターナー学説とかに頼って、この問題への答えをしてしまう傾向が強かった。

著者はこれまでの傾向を説明しながらも、新しい傾向としての「自己満足的」になることを抑えたアメリカ国民史の出現に注目する。むしろ、「過去と現在とについてしばしば強い自省的態度をとること」（90頁）で自国の歴史の中に独自の意義を見出そうとする研究傾向や国民意識の中に、アメリカ人が成熟した国民意識を形成しつつあることを暗示している。

さらに、このアメリカ人の自己意識の形成を説明するなかで、特に「国民史の中の南部」の1章を設け、アメリカ人一般とは異なった歴史経験をした南部人の歴史に焦点を当てているのも見逃せない。南部の人種差別を是認するかたちで南北が和解し、白人アメリカの融和がなされたこと、従ってアメリカが「過去の重荷」（82頁）からは決して自由になれない発展の仕方を経験せざるをえなかったことを嘆く著者の気持ちが行間から伝わってくる。

しかし、『アメリカ南部の夢』（井出・明石編 有斐閣、1987）などで扱われたような最近の南部の復権の原因を、この「過去の重荷」との関係の中で説明されたならば、「国民史の中の南部」をさらに的確に捉えたことになっただろうと思われてならない。

「日本から見たアメリカ史の意味」は特にユニークな章である。福沢諭吉の「西洋事情」以後、高木八尺の偉大な業績などを通して日本におけるアメリカ史の研究の足跡を振り返り、次のように結論していく。

「日本人が今後、世界の中で建設的な役割を果たしていくためには、多様な民族人種から構成されいる国際社会に適応するとともに、国内社会を国際的により開かれたものにしていかねばならない。それはたんに政策上の問題ではなく、多様なものを受けいれる開かれた精神、差別や偏見から自由な精神を鍛えることを必要とする。こうした国際化を進める上で、われわれは……多民族・多人種社会としてのアメリカの歴史から……多くを学ぶことができよう」(108頁)。日本が世界により開かれたものになる必要のあることに異論はないはずだ。とすれば、やはり著者のこの結論はアメリカ史を学ぶ者として心しておく必要があるだろう。

ただ、本書の難点を敢えて挙げれば、それは第VI章以後XI章までの、著者が「アメリカ史の主要問題」として説明したところが、結果的にこれまで通りの概説的な通史で終わってしまった点であろう。確かに、説明には多くの学説を取り入れるなどして工夫が見られるが、前半でユニークなアプローチを試みているだけに、残念な気がする。

また、本の構成上仕方のないことだろうが、この後半部分に前半での説明と重複している事項があるのも気になる点である。

著者が第I章で指摘するアメリカ史の主要な特色は標準的かつ普遍的な解釈だと思われる。ここで指摘した8つの特色を中心にしてもう一度第VI章以下で説明したら、ユニークなアメリカ史論という本書の特色はもっと生かせたのではないだろうか。

しかし、巻末の「参考文献解説」は実に十分すぎるほどゆきとどいており、著者が言うように「アメリカ史【の】……研究を進める上での参考書として」(ii頁)大いに威力を発揮するだろう。前述の『アメリカ政治史』もそうだが、著者の著作には詳しい文献紹介があり、著者の後に続く研究者へのこころ配りが実にうれしく、手元で大事にしておきたい一冊となっている。

土田 宏（上智短期大学助教授）